

優 秀

— 第一部門 —

自立への手さぐり



岡 山 県

浜 野 博

高校三年の秋、偶然がたてつづけに三つも重なって、私の事故は起こった。

一九五九年（昭和三四年）の十月三日、厚い雲の下で体育祭が行われた。遅い昼食をとり教室に入ると、クラスのひとりが「だれか、ムカデ競走に代わって出てくれんか」と言った。私はムカデ競走に出たことがなく興味もあったから、「ぼくが出る」と答えた。

遅れて行った私は、はじめ列の最後尾に付いた。足馴らしの練習をした後、だれかが、百八十センチでクラス一の長身の私に、「やっぱり、浜野がいちばん前に行けえや」と言い出し、私も抵抗なく従っ

た。

スタート早々に、足がもつれて倒れた。長い二本の荒縄に十人の足首をそれぞれ鉢巻で縛っただけなので、倒れた私の背に、後ろの九人が面白がって飛び乗る。ひとしきり大騒ぎしてから、起き直ってまた走り出した。

最初のコーナーで、また前のめりに倒れた。だが、今度は地面にくぼみでもあったのか、前方から強い力で押されたように、額をせき止められてしまった。荒縄のゆるむ分だけ、後ろの九人の力が止まらずに押し出してくる。

首ねっこがグイッと持ち上がり、恐ろしい力が頭全体を内側へ巻き込み始めた。あごの先が胸に押しつけられ、首の根元を支点にして頭が裏返しにへし曲げられていった。

「あかん！」と、声にならない叫びをあげた。同時に、体の深いところでボクッ・ボクッと骨の折れる鈍い音が二度はつきりと聞こえた。

一瞬の間があって、両足の先からスーッと力が抜け、伏せたまま空中へ浮かび始めた、そのときは疑いもせずそう思った。頭まで浮いたときに自分は死ぬのだと思った。恐怖はなく、むしろぼんやりとした心地よい気分だった。胸のあたりまで宙に浮いて（そう信じて）、しかしそこまで止まってしまうた。

「おい、どねえした？ 大丈夫か」

だれかがそばに来てしゃがむと、耳元で呼びかけながら私の肩に手を掛けた。そのとたん、私はありったの声をしぼって叫んだ。

「動かすな！ 首が折れた。動かしたら死ぬ！」

ビクッとしたように手が引っ込み、「担架持ってこい」という声が、頭の上で聞こえた。

下宿の隣室にいた医大生から、柔道の試合で頭から落ちて首の骨を折った選手が、審判に「しっかりしろ」と強く揺さぶられたとたんに、がっくりと息絶えたという話を聞いたことがあった。それきり忘れていて、思い出すこともなかった。それが、自分の肩に手が触れた瞬間、突然鮮明によみがえってきて、夢中で「動かすな！」と叫んでいたのだった。

救急車で日赤病院からすぐに大学病院へ移送された。即日、頭蓋骨の左右にドリルで穴をあけて、五キロずつの重りを下げるようになったと告げられた。折れた首の骨を引き延ばして固定するのだった。足でも折ったかと思い、バスで二時間かかって到着した両親は、この有り様を見て死ぬほど驚いたという。

文字どおり生死の境を何度も行き来したらしい。医師は、はじめ「半月持ちこたえることができれば」と言い、半月たつと「もう半月」と言われ、一ヵ月半が過ぎて、ようやく当面死の危険は去ったと告げられたという。母はずっと後年になってから、当時を思い出して、「あのときは、ほんまに地獄じゃった」と、つぶやいた。

事故から二ヵ月後に、同じ岡山市内の労災病院に移った。この病院は建ってまだ五年余りで、脊髄損傷の治療では、当時としては国内でも最先端の治療ができるところだった。

私のけがは、頸椎の五、六番の間が折れ、頸椎はほとんど完全に断たれていた。運動・知覚神経ともに、胸のちょうど乳のところから下がマヒしており、さらに、両手の十本の指もまったく動かなくなつた。幸い肩と腕は動いたので、指にフォークを縛りつけて食べ、本のページをめくることはどうにかできた。

翌年の春先に、ようやく車イスに乗れるようになった。背もたれを大きく倒したリクライニング式車イスに乗せてもらい、平らな廊下ならゆっくりと漕いで進むことができた。

その頃から、毎朝別棟の「機能回復訓練室」と書かれた大きな部屋へ行つて、訓練を受けることになった。最重度の私は、マットに寝かされて、マッサージ師の資格を持った職員の笛の合図で頭と足を上げる（つもりで力を入れる）運動をやるくらいだったが。

家業の魚屋を長く休むわけはいかず、母の手も商いには欠かせなかった。店を手伝っていた姉は、すでに結婚して家を出ていた。二歳下の妹は中学を出て郷里のレンガ工場で事務員をしていたが、両親が説得して彼女を退職させ、私の付き添いとして寄越した。

事故から一年後の秋、私は手の手術のためにまた大学病院へ一時転院した。手首を大きくL字型に切開して、腱をまとめて引っ張り、五指を軽く曲げた形で固定する手術をした。同時に、腰骨の一部を削

り取って、親指と人指し指の間に埋め込んだ。

手術の結果、包帯を巻いて軸を太くした鉛筆を右手に持って字が書け、コップや牛乳びんなども持てるようになった。

それまでは、頭に浮かんだ俳句や短歌を妹に書き取ってもらっていたが、私の言う漢字を妹が知らず、うまく説明できない時など、いら立って暴力を振るったことさえまれではなかった。三十数年を経た今でも、その記憶は苦く重たいものとして私の心に残っている。

まる一年、まったく字の書けない時を体験して、あふれてくる想いの何分の一も人に伝えられない苦しみを味わった後だけに、「また字が書ける」という喜びは、言い尽くせないほどのものだった。何をやっても長続きせず、いつも半端で終わっていた私が、手術後に日記を書き始め、三十年余り何とか持続して、今ではノートで八十数冊になっている。

二年間入院したが、機能訓練の成果もほとんど見られないままに、退院が決まった。

県南の瀬戸内海に面した町にある実家には、寝たきりで帰る私のベッドを置ける部屋などなかった。退院が決まると、縁先の一面に、父はブロックで囲った部屋を急いで造った。

一九六一年十月、私はもう二度と岡山へ来ることはないのだと思いながら、わが家へ戻った。町ではまだ珍しかった大学へ進んで「故郷に錦を飾る」息子の姿を、父は確かに期待していたはずだった。しかし、父や家族も私の部屋を用意して、黙って迎えてくれた。

退院しても、やることは何も見つからなかった。だが、やりたいことを見つけるより先に、やることが向こうからやってきた。

「ひろちゃんはまだ歩けんそうなから、うちの子らの勉強を見てくれんかな」と、近所の母親たちが言ってきたのだった。

けがの直前まで、私はへき地の学校の先生になりたいと望んでいた。本物の教師ではないが、思いがけずそれに近いことがやれるわけで、引き受けてみるか、という気になった。

従弟を含めた中学生の男子六人が通ってきて、小さな塾が誕生した。私は窓際へ寄せたベッドに横向きに寝て、子どもらは質問やできた答えを私のところまで持ってきて見せた。

子どもたちとの出会い、私にはよい刺激だった。だが、金をとって受験勉強の助けをすることには釈然としないものがあつた。

塾では、家で作文を書いてこさせたり、ときにはその日の勉強の代わりに作文を書かせたりした。書き溜めた作文を彼らの手でガリ版切りから謄写印刷、製本までやって文集を作った。できたのを彼らの家族や友人、担任の先生らに配って読んでもらった。

身近で本の読める場を提供したいと、三十冊の絵本と童話で文庫を作り、土曜の午後開館した。買い足したり、不要の本の寄贈を呼びかけたりして、本を増やしていった。

自分で借りに来られない障害児たちには読書の機会はあるのかと、ずっと気にかかっていた。障害児

や長期入院児に図書を届け、布絵本づくりをしている札幌の「ふきのとう文庫」の活動を知り、小規模でなら私にもできるかと、主宰者の小林さんに手紙を書き、札幌にならいうながら始めた。今は、岡山市内の主婦を中心とするグループが、布絵本づくりなどで着実に活動をつづけている。

塾をやりながら、私はつねに他の「何か」を探していた。自分は何をやりたいのか。自分には何ができるのか。それが、入院中からずっと離れることのない私の課題だった。

町に残っている同級生やよそから移ってきた青年たちに呼びかけて読書会を始め、それが発展した「何でも話す会」は数年つづいた。

社会人となった中学や高校の同級生たちは、年ごとに自信を深め、地に足の着いた生き方をしているように思われた。それに比べて、私は漠然とした不安の中でただ流されて生きているだけとしか思えなかった。

事故から五年目の一九六四年（昭和三九年）の春、別府の国立病院に入院した。もう一度訓練して、せめて自力で寝返りが打てるまでになりたいと思った。付き添いなしに単身で入院できる所を捜して、別府行きとなった。

車イスでのスポーツを日本に取り入れた医師がおり、期待して出かけたが、リハビリとしては岡山でのそれ以上のものは得られなかった。ちょうど半年別府にいて、東京オリンピックの始まる数日前に、迎えに来た父と弟とともに成果の薄い長旅から帰ってきた。

字が書けるようになってからは、手紙と日記以外に短歌なども書き留めていたが、次第に、短歌では胸の内から噴き出してくる想いを吐き切れない気がしてきた。日々の心持ちや生活の断片を書きつけて、障害者グループの雑誌に送ったりもするようになった。

やがて、孤独で迷い悩むことの多かった自分の高校生活を、小説として書いてみようと思った。二十代も終わりに近い頃だった。書き方の基本さえも知らないまま、ほとんど衝動的に書き始めていた。毎日やるべきことのあるのが心の弾みとなって、日に一枚、二枚と休まず書いて行った。半年余りで、二百枚ほどの原稿が積み上がっていた。

この「小説」自体は習作以下のものでしかなかったが、友人の知り合いに見てもらい、彼の知っている文学のサークルを紹介してくれた。稚拙なものではあっても、夢中で一つのものに取り組んだことで、私はもうひと回り広い世界の人たちと知り合うことができた。

さらに、障害者の外出を推し進める会などの情報も入るようになり、やがて、退院のときは二度と見ることがないと思った岡山市へ、年に何度かは出かける機会も生まれてきた。

大学の通信教育の受講も検討してみたが、泊まり込みで年に一度のスクーリングに出かけるのはやはり無理で、諦めるしかなかった。

新聞で見た社会通信教育の案内で、私は「健康保険請求事務」を履修した。何かで定収入を得たいという、追われるような思いがあった。修了した後で、町内や近隣の町の病院・医院に当たってみたが、

どこも自分のところだけで間に合っているとの返事だった。

もう一つ「校正事務」を学んだ。岡山や東京の出版社へ、郵送で校正の仕事をもらえないかと手紙を書いたが、一社から丁重な断り状が来ただけだった。しかし、校正を学んだことは、以後誤字の少ない文章を書くうえで大いに役立ったと思っている。

母は魚屋の妻として働きづめで、早くから脚と腰に持病を抱えていた。その母が七十近くなり、私の介護に堪えられなくなってきた。

妹も結婚し、高校を出てサラリーマンになっていた弟は、私を養いながら共に暮らすためには家業を継ぐのが最良の道だという父の説得を容れて、退職して魚屋になっていた。彼も結婚して妻と一緒に店を背負うようになると、母は家を守り、弟の子らと私の世話とでずっと忙しく、荷の重い日々を送っていた。それも、もう限界が見えてきた。母は私を介助するにも片手をベッドに突きながらでなくては無理になってきていた。

母は倒れて死ぬまでは、「もう面倒は見ない」などとはけっして口にしないだろう。何も見ないふりをして母の介助を受けつつづけるか、それとも、家を出て施設に入るか。

迷った末に、療護施設への入所を決心した。入所申込の書類を取り寄せてからもなお数ヵ月ためらっていたが、一九八〇年（昭和五五年）の春、母が疲労のために倒れて二週間起き上がれず、懸念したことが現実となった。

もう迷ってはいられなかった。このままでは、母の生命をさらに縮めてしまうだろう。二十年も家族に守られて家で暮らせたのは望外の幸せだった。絶望の中で施設へ追いやられるのではなく、自分から新しい場所での生き方を求めて、明るく家を出たいと思った。

施設行きの意思を告げたとき、いちばん心配をし、悲しんだのは母だったが、私の気持ちを变えられないと知って最初にそれを認めてくれたのも母だった。その年の七月、私は岡山市の北の郊外にある重度身体障害者療護施設に入所した。

日本でも早期に創立されたこの療護施設は、開拓者としての栄光とともに、多くの問題も抱えていた。行き場のない成人障害者を、とにかく大勢収容する必要があったから、八人部屋で定員百二十人という大施設になった。

私は施設内の仲間といっしょに、各ベッドを仕切るカーテンの設置など、職員や管理者との話し合いを繰り返しながら、暮らしよい生活の場を作ろうと呼びかけてきた。

一方で、入所した直後から、私はここを出ることをつねに考えてきた。施設の住み心地の善し悪しとは関係なく、どうにかして町に住んで、そこで一人の市民として生きたいという思いが、私の心を離れないのだった。

魚屋を継いだ弟は、その後寿司・割烹の店を始めて忙しくしており、施設を出たとしても郷里に戻って暮らすことはありえない。私は早くから、人と会えば「岡山市内に借りられる家はないか」と言いつ

づけてきた。

寝返りも打てず、排泄を含めて生活の主要な部分を他人の助けに頼らねばならない身で、自立したいと望むのは、人としての分を超えた願いではないかと、幾度も考え、悩んできた。重度障害者の自立の例はまだほとんどなかったから、内にも外にも乗り越えねばならない障碍が余りに多過ぎるのだった。

施設に入って七年目に、「自由に改造して住んで構わない」という願ってもない借家が、知人のつてをたどって見つかった。それまでに何件か話があり、どれもまとまらなかった後の朗報だった。東京なとで、五十回、百回とアパートへの入居を断られた障害者が今もいるとの話を耳にしたが、私は幸福であり、良い理解者に巡り合えたと言えよう。

すぐに賃借契約を済ませ、障害者の「世帯更生資金」を借り受けるなどして、家の改造に取り掛かった。自立のための具体策は何もない状態での「自立準備」だった。しかし、ここで踏み切らなければ、このような好機は二度と来ないかも知れない。いつまで考えても確かな見通しなど持てそうにないなかで、自分を一步でも前へ押し出すには、これよりも良い方法は見つかりそうもなかった。

「わが家」ができ、自立して暮らせる外側からの条件は整った。あとは、わが身をそこに置いて毎日を経るための態勢づくりだけだった。問題は、借家契約に判を押すように明快な形では前に進んでくれないことだった。

施設から日帰りで通うだけなら、介助者を必要としない。リフト付きの福祉タクシーで出かけて（料

金は往復で五千円かかる）、本を読み、手紙か何か書いて、ポットで沸かした湯でコーヒーなど飲む程度なら可能である。

けれども、そのままでは永久に日帰り以上には進展しない。そこを打開するのは、あえて言えば三十年の障害者生活の中でもっとも難しいことと思われた。その予感にはぼ的中した。家を借りて七年余りたった現在も施設から出ることができず、いつ出られるという見通しもはっきりしていないのだから。

とはいっても、七年間に何の進展もなかったわけではない。取っ掛かりは、ここでも学習塾だった。知人を通して、小学生の勉強を見て欲しいと頼まれた。土曜の午後の二時間だけなら、毎週通うことはできる。三人の子の月謝ではタクシー代もまかなえなかったが、自立の基盤固めの出費だと考えることにした。

ときどき施設に来て、同室の仲間などの外出の介助をしている大学生がおり、その誠実な対応に感謝しながら、こういう人が力を貸してくれないかと思っていた。思い切って彼に話しかけて、週末に自宅に一泊する、その介助をしてもらえないかと言った。彼は、「外出だけでなく、そういう手助けもぜひやりたかった」と答えた。その日から、もう一段の高みへと上ることができた。

土曜の夜の就寝時と日曜の朝の起床時、彼の手を借りて車イスとベッド間の移動・着替え・排尿をすませ、週に一度の外泊ができるようになった。以来、大学卒業の間近まで、家族の不幸のあった時やよほどの緊急な用事がない限り、三年にわたってほとんど毎週末になると介助に来てくれた。

彼がいる間に、もっと広く呼びかけ、役所にも出向いて、自立の可能性を確かなものにしたいと思った。しかし、一年でと思ったことは三年、三年先にはと考えたことが五年たっても具体化しない。この繰り返し、私にとっての三十年だったと言ってよいだろう。

彼の卒業の年あたりから、他の大学のボランティア・サークルや個々に知り合った学生たちによって、交替で介助の日程を組むことができるようになり、一泊が二泊に増えて、週末毎に二日ずつ塾を開けるようにもなった。

この春、今のまま「だれか手を貸して」と言い続けるだけではいつまでも展望が開けないので、ゆるい規約の会を作り、それを足場にやっに行こうということになった。五月に、『インディー94』という「浜野を自立させる会」とでもいうべきものが生まれた。ニュースを発行し、私の知人を中心に会員と賛助を募って、たとえば小さなシンポジウムやレクリエーションなどを積み重ねながら、協力者の輪を広げようと話し合っている。

振り返ってみると、施設に入って十四年になり、家を借りてからでももう七年である。その間にやっとな週に二泊できるようになった。このペースで行けば、七泊つまり自立が実現するにはあと十年余りかかる計算になる。「いつごろ自立するつもりですか」と、真剣に問いかけてきた学生もいる。私は答に詰まったが、大学二年の彼が卒業するときを目標にしたいと、本気で考えるようになっていた。そうなのだと、切実に思う。

私が自立したいと望むのは、「車イスに乗った一人の住民」として、「普通の市民の一人」として町に住みたいという、その想いが年とともに強くなっているからである。

私もすでに五十歳を越した。事故があと十年遅かったらとか、せめてリハビリで身の回りのことができるようになっていたら、などと、弱気になったときほど後ろを向いてグチが出てくる。「たら」と「もし」を捨てたところからしか、私の再出発はありえない。

自立を実現したとしても、その先何年体力と気力が持続するかまったくわからない。遅すぎる自立願望であるとしても、ここにしか私のめざす生き方はない。とすれば、多くの人に支えられながら、この後も「自立して生きたいのだ」という意思表示を、繰り返し、飽きることなく続けて行くしかない。手さぐりは、まだ始まったばかりなのかも知れない。

浜野 博

昭和十六年生まれ 現在施設に籍を置きながら地域生活にも挑戦中 連絡先
岡山県岡山市

選 評

高校三年の運動会という日常生活の中での事故で、重度の障害者になられた事実にも、まずぞっとしました。思いがけないこの運命の激変を受け止めることになったこの方の、その後の何十年もの軌跡が、静かな語り口をもつ文章によって、しみじみと伝わってきます。積極的に何かを求め、道を開こうとしても、思ったより、何年もかかってしまう。いま求めている自立した生活も、いつ実現できるか、との言葉に、日本の福祉の貧困を思わずにいられませんでした。

(羽田澄子)